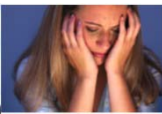


# 秋まき小麦「きたほなみ」を倒さず 高品質に作る栽培法 -道東版-

## 💡おすすめ① 播種量は140粒/m<sup>2</sup>



播種量が多すぎると過繁茂で倒伏します。倒さないために、越冬前茎数**900本/m<sup>2</sup>**以下を目標としましょう。播種量を**140粒/m<sup>2</sup>**とし、**適期**に播種すれば大丈夫です。

## 💡おすすめ② 基肥窒素量は2kg/10a

基肥窒素が4kg/10aでは過繁茂の恐れがあります。下表の条件に合っていれば**2kg/10a**が適量です。

基肥窒素を2kg/10aとする条件
1) 圃場副産物のすき込みにより2kg/10a以上の窒素供給が見込まれる圃場(圃場副産物はC/N比が低くすき込み直後から窒素供給を見込めるものに限る)。
2) 前作への堆肥4t/10a以上施用により2kg/10a以上の窒素供給が見込まれる圃場(前年秋施用を含む)。
3) 前作付けによる窒素の吸い残しが予想される圃場(表層0-20cmの硝酸態窒素量2kg/10a以上)。

## 💡おすすめ③ 起生期: 茎数過多なら追肥は幼穂形成期重点型

- ① 起生期の土壤硝酸態窒素診断で窒素施肥量A(kg/10a)を求める(北海道施肥ガイド2010)。
  - ② 起生期の茎数を求める。1000本/m<sup>2</sup>以上の場合は③-1、1000本/m<sup>2</sup>未満の場合は③-2、のように対応する。
  - ③-1: 起生期は**原則として無追肥**とし、幼穂形成期にA(kg/10a)の全量を追肥する。**なお、低窒素地力が予想される場合は以下の③-2と同様に対応する。**
  - ③-2: 起生期に追肥できる。
- 例: 起生期に2~4(kg/10a)追肥し、幼穂形成期にA-(2~4)kg/10aを追肥。



## 💡おすすめ④ 止葉期: 上位茎数×葉色値で追肥量が分かる

- ① 止葉期の窒素吸収量(kg/10a) = 0.0004 × (止葉期の上位茎数、本/m<sup>2</sup>) × (葉色値、SPAD) - 1.2 を求める。
- ② 成熟期の窒素吸収量(kg/10a) = 0.58 × (止葉期の窒素吸収量、kg/10a) + 6.6 を求める。
- ③ 成熟期の目標窒素吸収量(kg/10a) = 0.017 × (目標収量(粗原)、kg/10a) + 5.1 を求める。
- ④ 止葉期以降の窒素追肥量(kg/10a) = {(成熟期の目標窒素吸収量、kg/10a) - (成熟期の窒素吸収量、kg/10a)} / 0.7 を求める。

注)

- ・上位茎数は、最上位完全展開葉の葉耳高10cm以上の茎数。
- ・窒素追肥量は止葉期4kg/10a、開花期3kg/10aを基本とし、合計7kg/10aを上限とする。
- ・開花期追肥の方が倒伏を招きにくい。
- ・上位茎数が900本/m<sup>2</sup>を超える場合には特に倒伏に留意する。
- ・下層土等からの後期窒素供給が予想される土壤条件では止葉期以降の窒素追肥は行わない。

